

学びの風便り

リーディングスクール通信 60 R8.2.20 (金)

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



伝え合おう、私たちの学びの現在地！

令和7年度 リーディングスクール・フェス開催

1月30日、「リーディングスクール事業」の成果共有の場として「リーディングスクール・フェス」が開催されました。テーマは「伝え合おう、私たちの学びの現在地」。当日は松本市内教職員の1割を超える約170名が参加し、25校(20組)の実践校がブースを構え、1年間の歩みを力強くアウトプットしました。

会場には、互いの実践に学び合おうとする先生たちの前向きな空気が満ち、「自校の取組を見つめ直す貴重な機会になった」「校内研修だけでは出会えなかった視点に触れた」といった声が数多く寄せられなど、単なる報告会を超えた、熱気と対話に満ちた学びの場が実現しました。

「教師の仕事はフィードバックでできている」

「フェス」は、岩瀬直樹先生(軽井沢風越学園校長)によるワークショップからスタートしました。

冒頭、岩瀬先生は「教師の仕事はフィードバックでできています」と述べられました。思いもよらない言葉に会場の集中力がぐっと高まります。日頃、私たちが何気なく行っているフィードバックについて「評価ではなく学びを支える行為」「改善・成長・前進することが唯一の目的」といった目的や観点、伝え方の工夫について学び、セッション参加への意欲と見通しが高まりました。

◆セッションタイムの前に、岩瀬先生からフィードバックの観点についてのワークショップをしていただいたことで、見通しをもって前向きにセッションに参加することができました。あらかじめ視点が示されていたことで、他校の発表や協議を落ち着いて受け止めることができたように感じました。

◆フィードバックとは何か、を考えさせられました。自分にとって、相手にとって、評価ではなく学びのための情報という言葉が心に残りました。特に、フィードバックの目的を聞いた上で、伝えることが有効だと感じました。

各校の挑戦が響き合うアウトプット・セッション

続いて行われた実践校のアウトプット・セッション。フェスのメイン・コンテンツです。各校がこの1年間、どのように「学びの改革」に向き合ってきたのか、成功体験だけでなく、試行錯誤や悩みの過程も共有されました。

参加者は「フィードバックの意義」を胸に 関心のあるブースを自由に巡り、発表を聞くだけでなく、活発な質問やフィードバックを送り合いました。研究テーマの具体化のプロセス、校内研修の工夫、子ども同士の振り返りの仕組みづくりなど、多様な実践が共有されました。

◆発表者の先生から、「自校の実践を伝えたい」というエネルギーを感じる時間でした。発表者以外の発表校の先生方が、傾きながら発表者を見守っていたり、資料を見やすいようにサポートしたりしている姿があり、「主となる職員だけでなく、皆でこのように進めてきた実践」であることが、この時間からも伝わってきました。



◆自分たちの学校の周りにもたくさんのチャレンジと悩みと葛藤が溢れていて、一人じゃないんだと改めて感じることができたことがとても大きい意義だったと思います。また、1年という単年を見通すというよりは数年後、「どうなっていたいか」「どんな授業を創っていたいか」を語っている先生がおり、その通りだと思いました。先の時代が見えないからこそ、私たちの力が問われていると思います。難しいことではあると思いますが、先を見据えてまた自分たちの学校で実践を積み上げていきたいと思いました。

◆たくさんのフィードバックを先生方からいただいて、研究の方向性は間違っていないのだと自信がもてました。共感していただけるだけで心が救われました。自校に戻ってからも職員にもどんな発表をしたか伝えることができました。

◆各校の学びの姿を見るに、やはり子どもだけが頑張るのではなく、先生たちだけが頑張るのではなく、「ともに学びたい」というそれぞれの活動がより学びにつながるのだと感じました。業務削減とは言われながらも、先生たちが楽しみながら授業を準備し、展開することで子どもたちの学びも深まり「勉強が楽しい」になり、学校全体が活気づいてくるような気がします。何より、発表者の先生方が楽しそうに、明るくお話してくださっていたことが印象的でした。

◆どの学校にも共通していたことは「やってみる」という姿勢でした。その学校が一丸となって、試行錯誤しながら、ときには失敗もしながら、前向きに（しかも、とても楽しそうに）取り組んでいることが伝わり、聞いていてワクワクしました。自分の学校でも、子どもたちや先生方とこういうチャレンジをしてみたい！と思える機会となりました。

◆研究主任の先生の悩みや、うまくいかないことをありのままお話をされている先生の発表が心に残りました。そこから研究がはじまるのではないかと思いました。また、その先生が語られている悩みは自分自身にも重なることがあり、共に考えたい内容でした。

♥子どもたちと共に発表者の先生方も学んでいる姿勢が伺えて、様々な実践に興味深く聞かせていただきました。自分の学校だったらと考えながら聞けて楽しかったです。フィードバックの際、共感を前提にオープンクエスチョンで問いかけたら、さらに発表者の考えがわかった気がしました。



ふりかえりワークショップ ～ つながりの中で深まる学び

セッションの後は、再び岩瀬先生のガイドによるリフレクション（振り返り）の時間です。小グループに分かれ、自分が体験したアウトプットやフィードバックについて、その「良さ」や「難しさ」を語り合いました。アイスブレイクを経て、先生たちの意気も大盛り上がり。「フィードバックをしようと構えると難しかったが、相手の良さを見つけようとすると自然に言葉が出た」など、実践を通したからこそ得られた生きた実感が共有されました。

◆話を聞く、グループで対話をする、実際に体験する、また必要なポイントについてはしっかりと教えていただく。こうした活動のバランスやタイミング。そして和やかな雰囲気と対話を促す雰囲気づくり。岩瀬先生の公演自体が授業のモデルになっていると思いました。時間が経つのがあっという間でしたが、授業もそんな風にしてもらえるといいなと思っています。

◆「フィードバック」とは、改善・成長・前進することを唯一の目的をすること、相互作用があること、良し悪しは相手が決めることなど、話の内容がストンと心に落ちました。グループで対話しながら学ぶ松本スタイルが心地よかったです。子ども達も、このような対話的な学びを進めることで、自己肯定感が高まったり、新しいことに挑戦する意欲が湧くのではと思います、大いに学ばせていただきました。

◆少し意識することで、毎日自分が行っている子どもへの声かけや働きかけが変わるような気がしました。自分自身をメタに見ること、その上で意識的に自分のフィードバックを少し変えてみることで日常の中で実践していきたいと思います。

♥フィードバックについて曖昧な理解をしていました。実際にワークショップをやってみて、自分のやってきた実践について、ご意見をいただき、お褒めのお言葉をいただき、自分のやってきたことは良かったんだと確認できたり、「このようにやってみたら」のようなアイデアを言ってもらったりして、これからも「よし、子どもとともにやっていくぞ！」という気持ちにさせてもらいました。このように、前向きになれるフィードバックを研修会などで取り入れていきたいと感じました。

◆本校でも一人一公開を行っています。参観した各々が感想を書いて、研究主任がまとめています。今回行った「フィードバックの観点・目的」を明確にして授業者も参観者も行うことができれば、もっと効率的に深く次への道筋が見えてくると思いました。今回のように1、2分の短いフィードバックでもたくさん話せることができました。今までの研究会にない充実感を感じると感じます。「フィードバックは未来を作る共同作業」とも心に残る言葉でした。本校でもぜひ取り入れていきたいと思いました。

ここから始まる、松本の新しい学び

閉会時の会場は、開始前よりもさらに明るく、前向きなエネルギーに満ち溢れていました。20校の実践は、決して特別なものではありません。それぞれの現場で、先生方が子供たちを思い、一歩踏み出した結果です。

今回のフェスで共有された「学びの現在地」。それはゴールではなく、次の一歩へのスタートラインです。今回生まれた対話と学びの循環を、松本市のあらゆる学びの場へと広げていきたいと思っています。

次年度、「みんなのミライの学校」を目指した、あらたな私たちの挑戦が始まります。私たちの“学びの現在地”を確かめ合いながら、子どもが主人公となる学びの改革をともに進めていきましょう。ご参加いただいた皆様、そして準備いただいた実践校の皆様、本当にありがとうございました！

